ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第34号　2017年10月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　元校舎を活用した博物館を主とする施設の存在意義 ―学校資料の保存と活用の観点から―（承前）	一色　範子	2
逸話と世評で綴る女子教育史（34）　下田歌子と桃夭女塾	神辺　靖光	6
元第一高等中学校教諭（画学）佐々木三六の動向 ―石川県尋常中学校教諭として活動―	谷本　宗生	10
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（33） 学校沿革史にみる補習科・専攻科（29）：岡山県（2）	吉野　剛弘	12
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（7） ―早稲田大学大学史資料センター「3号館旧蔵資料」―	田中　智子	15
教育における自治（6）　石田雄『自治』を読む(5)	冨岡　勝	20
刊行要項（2015年6月15日現在）		22
編集後記		23

コラム
元校舎を活用した博物館を主とする施設の存在意義　―学校資料の保存と活用の観点から―（承前）

一色（いっしき）　範子（のりこ）
（佛教大学大学院）

本稿は前号の続編で、元校舎を活用した博物館を主とする施設の存在意義について、学校資料の保存と活用の観点から考察するものである。

（3）新たな学びの場

続いて、各施設がどのような機能を果たしているかに着目する。例えば福井県教育博物館（以下、教育博）では特集展示「福井震災と学校」にて、同館のある坂井市をはじめ、近接するあわら市や福井市の関連資料を多く展示した（2017年6月23日～7月17日）。会期中は付近の地域住民が多数来館した[1] ことから、福井地震発生後、約70年経つ現在においても地域住民の関心は高いことがうかがえる。また、観覧者にとって自分の住むまちについて改めて考える契機となったのではないだろうか。

京丹後市立網野郷土資料館においては、学校の要望があれば職業体験として中学生を受け入れていた。体験内容は、受付や資料調査、清掃などであり（2日間）[2]、展示物に随所、生徒が作成したパネルやキャプションが設置されている。このように生徒の職業体験の場として活用されることもある。

この2事例から、児童・生徒のための学びの場である学校としての教育的機能は失われたものの、生涯学習の場としてより多くの人々に開かれた学びの場としての機能が両館に付与されていることが分かる。

一方、商業施設である北野☆工房のまち（以下、北野工房）においては、市民ギャラリーを主として館内の随所に学校資料を展示することで、少しでも多くの人々の目に留まるよう工夫がされている。例えば閉校前の北野小学校の様子だけでなく、テーラーを紹介するなど、神戸の文化も発信している。このように同館は、他の調査対象館と同様、観光客にとっても学びの場であることに変わりない。

（4）地域での活用

学校資料の存在意義は、少しでも多くの人々の目に留まり、それがどういう資料なのか、そしてなぜそこにあるのかということを、学校にゆかりのない

人々にも周知することにある。その方法の一つとして展示がある。

京都市学校歴史博物館は、前号でふれたように自治の単位である学区資料を多く所蔵している。それゆえ、卒業生や研究者からのレファレンスにも応じている。その内容は大抵、閉校した学校に関することである[3]。また、閉校後25年経った現在においても、館の敷地内に自治連合会の事務局があったり、毎年「開智夏まつり」がグラウンドで催されたりするなど、学区の組織や行事が息づいている。それは開智小学校の跡地であるゆえ、同館を拠点とした開智学区民としての意識が、地域住民に根付いているからであろう。

京都市学校歴史博物館での「開智夏まつり」の様子（2016 年 8 月 20 日筆者撮影）

北野☆工房のまちの講堂（2017 年 7 月 8 日筆者撮影）

一方、北野工房について、館内にある講堂はいまだ卒業生や地域住民の集まりの際に使用されている。これより、閉校になったとはいえ、学校が地域の拠点であると卒業生や地域住民に認識されていることが伺える。また、他の商業施設との差別化を図るため、学校資料を随所に展示している。同館は博物館や資料館と異なり、展示の仕方は異なるものの、学校資料を意図的に展示していることこそ、元校舎という建築物が活きる仕組みとなっているのである。

この2事例の共通点は、小学校の元校舎という点である。小学校は地域に根差した教育施設であるため、地域住民にとってコミュニティを形成し得る存在である。一方、教育博やふじのくに地球環境史ミュージアム（以下、ふじのくにM）のように、高校の元校舎を活用した施設は、包括する地域の範囲が広い。小学校は通学区に基づき、地域に根差した組織（＝コミュニティ）を形成する[4]。一方、高校は在校生と卒業生で規定された、より広範囲かつ多様

な人々が関わる組織を形成する。よって前者は、組織の関わる地域（＝面）が狭いため、地域と学校の関係性は密となる。一方で後者の担う「面」は広いため、学校と地域の関係性はけして密とは限らない。小学校の学校内歴史資料室について、地域住民がその開設に関わることは珍しくない。ふじのくにMの「学校記念室」は、地域住民とは限らない卒業生有志の手掛けた展示室であることは、その好例であるといって良いだろう。

これらより、筆者の調査の限り、校舎がもとは小学校か高校であるかの違いは、学校に関わる人々の意識の違いを生むと考える。

3. 元校舎を活用した博物館を主とする施設の存在意義

閉校後の校舎は、財政面や地域の要望などから必ずしも活用されるとは限らない。やむを得ず放置されたり、全く別の建築物として建て替えられたりすることもある。

本調査では、元校舎を活用した施設が閉校後も地域の拠点として機能している事例から、学校と地域を結びつける関係性の連続を見出すことができた。つまり、元校舎という目に見える存在は、人々に一種の安心感や郷愁をもたらす一方、学校は地域の中心的役割を担うという特性をもつことが分かった。後者は目に見えないものの、元校舎という空間や環境が創出するものである。元校舎が閉校前と同じ空間や環境を再現するのは困難である。しかしながら、かつて学校にあった資料を利活用することで、当時の状況を想像することはできる。そこに見る者自身の記憶を重ね合わせることができるのは、資料を収集・保管・展示する、博物館を主とする施設の醍醐味であろう。ここに元校舎を活用した博物館を主とする施設の存在意義がある。ただし、児童・生徒の学びの場としての学校の機能をもたなくなった閉校後の校舎について、どのように活用し、いかなる機能をもたせるかにあたっては、地域の要望がどの方向にあるかの確認が必要である。今後も全国各地において、多数の学校の閉校が見込まれることから、識者のみならず、地域ぐるみで元校舎を含めた学校資料の保存と活用についての検討が求められる。まずは専門家それぞれのもつ知識や知恵を共有し、多岐にわたる学校資料の現状の把握に努めることが肝要である。そこから見出された課題について検討を重ねることが、学校資料の散逸・廃棄を食い止める一つの鍵となるのではない

だろうか[5]。

学校資料としての元校舎の価値は、学校建築としての芸術・歴史的価値や、存在そのものがもたらす地域的価値、文化を担う創造的価値などにある。そのような価値を見出すことにより、元校舎とそれを取り巻くコミュニティの見直しと、元校舎にまつわる人々の記憶を残し活かすといった意識の醸成にもつながるだろう。

【付記】本稿で取り上げた5館の訪問日は、各写真の注釈にある撮影日と同日である。なお、本稿作成にあたり各館の関係者の方々には多くのご教示をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる。

1　会期中の来館者数は819名であった。また、1日当たりの平均来館者数は35.6名であり、特集展示の前後と比べ、およそ4.7名多かった。福井県教育博物館主任・柏谷秀一氏の教示による（2017年8月22日、10月31日）。

2　京丹後市役所観光振興課・小山元孝氏（元・文化財保護課）および同市役所文化財保護課・小北景子氏の教示による（2017年7月22日、9月7日）。

3　和崎光太郎「学校所蔵史料の保存と活用―京都市を事例として―」『日本歴史学協会年報』第31号、2016、24頁。

4　ちなみに京都市中心部においては、通学区よりも狭い「学区」が地域コミュニティの最も基礎となる自治単位として健在する。そのため、学校統合により通学区である校区は統合されても、自治単位である「学区」は統合されない。前掲　和崎論文、22頁。

5　そこで筆者と関西の学芸員・教員らによって、教育現場や地域での学校資料の保存と活用について検討するため、学校資料研究会が立ち上げられた（2017年4月）。研究会の発足の背景および会員の取り組みは以下の記事を参照されたい。

①「開かずの教室、宝の山　消失危機、専門家が研究会　貴重な剥製、江戸時代の家系図」（毎日新聞朝刊、2017年8月28日付）
https://mainichi.jp/articles/20170828/k00/00m/040/139000c

②「学校資料　歴史と思い出の宝を守る　地域や教員、価値の共有から」（毎日新聞朝刊、2017年8月29日付）
https://mainichi.jp/articles/20170829/ddn/013/040/024000c

③「校舎の片隅　光待つ「お宝」　「郷土資料室」活用へ動き」（読売新聞夕刊、2017年10月26日付）

＊このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（34）
下田歌子と桃夭女塾

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

国漢学系の女流教育家で跡見花蹊の活躍をもう一廻り大きくしたのが下田歌子である。

下田歌子は安政元（1854）年、美濃岩村藩士平尾錄蔵の長女として生まれた。幼名はせき。祖父は幕末の儒者・東条琴台である。長じてせきは漢籍を祖父と父に学び、和歌を京都在住の歌人・八田知紀に学んだ。幕末の動乱で平尾一家は上京して官に職を得ようとしたが、うまくゆかず錄蔵は眼病に倒れた。せきは、この間、湯島の絵師某に絵を習い、提灯や凧絵を画いて家計を助けた。明治5年10月せきは宮中に仕えることになった。和歌の師八田知紀が、宮内省の御用掛になったため、その紹介である。宮中に参上して皇后に拝謁した際、せきはその感激を数首の和歌に託した。彼女の歌才をみてとった皇后は、歌子の名を与えた。かくして平尾歌子となる。時に19歳、皇后はことの外、歌子を可愛がり、学者から講義を受ける時は必ず歌子を同伴させた。歌子は当代和洋漢の碩学・福羽美静、元田永孚、加藤弘之から直々の講義を受けた。明治12年、歌子26歳の時、剣客下田猛男と結婚した。幕末、猛男が武者修業のため、全国を経巡った時、美濃の平尾錄蔵方に留まり、互いに文学、剣術を教え合った因縁による。歌子は宮中を辞職した。

下田猛男は麻布に剣道場を開いて多くの門人を集め、各地の警察署に出向いて、警察官に剣術を教えていた。彼は剣技では名声を得たが、大酒家で、それがたたり、悪性の胃病にかかった。歌子は献身的に病身の夫を看病した。しかし長引く看病に、今度は歌子が病

魔に冒され、療養の身となった。明治17年5月、下田猛男は亡くなった。

これより前、明治14年の頃である。伊藤博文、山形有朋、井上毅、佐々木高行、土方久元らの政府高官が、下田歌子に女学校を開かないかという話をもちかけてきた。彼らは数年前、宮中女官として働く歌子と昵懇であり彼女の学識才覚を知っていた。当時、神田錦町に華族学校ができており、そこに高官の娘を入学させることができたが、華族学校は男子生徒ばかりだったし、教師が男性ばかりであった。娘の教師は女性であってほしいし、教養ゆたかで、新時代に対応できる女性でなければならない。それには下田歌子は打ってつけであると伊藤をはじめ高官たちは思った。夫の看病と自分の療養、歌子は自立した仕事をやりたかったのであろう。ただちに行動に移った。

明治14年の暮れの頃と思われる。麹町一番町の自宅に下田学校の看板を掲げた。一番最初の弟子と言われた本野久子の談話筆記が残っている。

> 私が始めて下田先生にお眼にかかりましたのは恰度一番町のお宅時代に正式に“桃夭女塾”が創立される前でした。その頃はまだ女塾と名乗らなければならなかっただけにお嬢さんがたは割合少なく、いつもお見えになる御弟子といへば伊藤公爵夫人、山形公爵夫人、田中公爵夫人、そのほか大臣方の奥様たちでした。まず眼目のお講義は源氏物語で、次が和歌のお直し。少さいお嬢さんがたには徒然草、古今集のお講義、その他ををりをり四書五経のお話などがあって、また別に他から先生がいらしってお琴のお稽古などもございました。……先生がああいうお方でしたから塾生の誰もが力を入れたのはすでに天下

一品の面影があった源氏物語のお講義と和歌のお題を頂いて作ることの二つでしたろう。和歌の宿題がよく出来ますと先生はあの無類の達筆で、そのうちの秀歌を短冊に書いて下さいます。それをお手本にお習字をするのですから、まるで自分の歌を先生のお手本通りに完全なものとしてゆくような気持ちで非常に励みになりました」。またいう。「その頃の先生は28ぐらいでしたか、黄八丈が流行した頃とて、丸髷にお髷をおあげになり、黄八丈のお召物に黒襦子の合せの昼夜帯を裾を引いてお召になるお姿は、まことに粋なものでございました

（『下田歌子先生伝』所収）

翌明治15年3月に下田歌子から下田学校の名で開学願書が提出されている（東京府文書）。学科は「国学を主トシ、漢学及裁縫其他女芸ニ亜ク」となっており、月謝は1円50銭、別に裁縫25銭、弾琴50銭であった。

その年、校名を桃夭女塾とかえた。「詩経」桃夭編にある

“桃の夭夭たる　灼灼たる其華
之子干帰　　其室家に宜しからん”

という新嫁の詩からとったものである。花嫁学校をイメージしたものであろう。

生徒は次第に集り、数十名に達するようになった。国文学や和歌は歌子の得意とする所であったが、漢学は父の錄蔵が教えた。また伊藤博文の紹介で、アメリカ帰りの若き津田梅子が英語を教えるようになった。

明治18年頃の下田歌子

桃夭女塾は塾の名の通り、塾生も預った。塾生の世話は歌子の母親・房子が当った。明治18年、次回に述べるように華族女学校が開校して桃夭女塾の生徒はあげて華族女学校に移るのだが、寄宿舎としての桃夭女塾はしばらく、そのままに残ることになる。

『下田歌子先生伝』（昭和18年刊）
『実践女子学園80年史』

元第一高等中学校教諭（画学）佐々木三六の動向
―石川県尋常中学校教諭として活動―

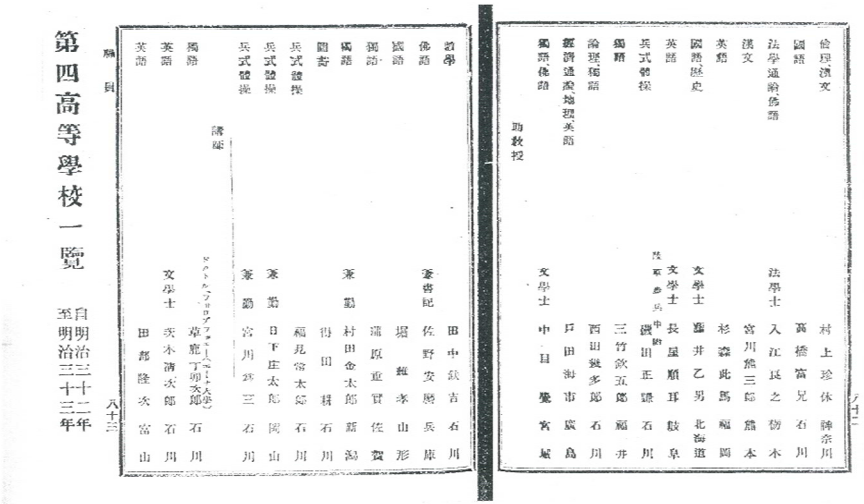
谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

画工佐々木三六（1860～1928年）は福井藩士の子弟として生まれ、トリノ王立美術学校で学んだ後、1885年に東京大学理学部植物学教室（小石川）の掛図画工として雇われる。1888年には、第一高等中学校教員となり、学課改正のためか1894年10月には、第一高等中学校教授を非職となっている。おそらく明治美術会（1889年に渡辺洪基を会頭として設立された我が国初の洋画団体）の会員同士らの助言もあったのだろうか、1897年10月に石川県尋常中学校の教諭となる。1911年10月に同中学校を退職するまで、美術部（山桜会）を組織するなどして金沢での青年子弟らと美術的な交流をはかっている。同中学校の生徒のなかには、のち画家となる伊東哲（1891～1979年）や遠田運雄（1891～1955年）もいる。佐々木三六と中学生徒らとの間では、回覧画帳「山桜」も残されている。また石川県師範学校でも、兼務教員を務めている。

筆者（谷本）が金沢を調査してみて、1909年9月に東宮殿下金沢行啓の折り同中学校にて、佐々木三六や生徒らの作品を鑑賞している史実も新たに確認することができたといえよう。佐々木三六教諭による「北陸風景水彩画」16葉をご覧になられ、また生徒らによる「白山植物解剖図」（シラヒゲサウなど）他も鑑賞され、白山植物には「珍しいものがある」とのお言葉をいただいたことが記録されている（石川県立金沢第一中学校校友会『鶴賀巡啓記』1909年）。佐々木三六が熱心に生徒らに教育指導したのは、たんなる画学（美術教育）の授業ではなかったのではないか、題材（モチーフ）となる

動植物や風景など、すべての事物に関する鋭敏な感受性をなによりも大切にする姿勢を訴えたものといえるだろう。

佐々木三六が帝国大学・第一高等中学校から金沢の中学教師になったのに対し、同じく明治美術会会員でもあった得田耕（1857～1932年）は、第四高等中学校助教授（図画）を1900年9月に退職し、その後京都帝国大学解剖学教室で解剖図などを作成している。得田は石川県師範学校を卒業して東京で画業修業をし、1883年に石川県専門学校の教員となった人物である。石川県師範学校などでも、兼務教員を務めている。なお得田耕と西田幾多郎は親族関係である。得田に石川県専門学校の生徒として洋画を学び、その才能を認められた早田楽斎（1872～1946年）は、のちに欧米留学するなどして動物画やパノラマ画家として活躍することになる。教育者であった佐々木三六や得田耕らが、北陸金沢の青年子弟らに与えた影響は少なくないものと考えられる。


第四高等學校一覽　自明治三十二年　至明治三十三年

教員

倫理	田中弘吉 石川
佛語	兼書記 佐野安慶 兵庫
獨語	堀維孝 山形
獨語	瀧原重實 佐賀
獨語	兼 村田金太郎 新潟
圖畫	得田耕 石川
兵式體操	稲見常太郎 石川
兵式體操	兼 日下庄太郎 岡山
兵式體操	兼 宮川孝三 石川
獨語	講師 ドクトル フロワ（ベルギー人）
英語	文學士 草鹿丁卯次郎 石川
英語	矢木清次郎 石川
英語	田部隆次 富山

助教授

倫理漢文	村上珍休 神奈川
國語	高橋富兄 石川
法學通論佛語	法學士 入江長之 栃木
漢文	宮川熊三郎 鳥本
英語	杉森此馬 福岡
國語歴史	文學士 藤井乙男 北海道
英語	文學士 長屋順耳 岐阜
兵式體操	陸軍參謀 中佐 磯田正譽 石川
倫理獨語	三竹欲五郎 福井
經濟通論地理英語	西田幾多郎 石川
獨語佛語	戸田海市 廣島
	文學士 中目覺 宮城

＊金沢大学50年史編纂室旧蔵データ

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（33）
学校沿革史にみる補習科・専攻科（29）：岡山県（2）

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（東京電機大学）

今号では、岡山県の補習科の整備について検討する。

岡山操山高等学校の補習科の設置後の状況について、沿革史では以下のように触れられている。

> 補習科教室も、新校舎の建設にともない、昭和四六年には一号館三階の現会議室に移り、さらに新校舎の完成によって昭和四七年から一号館三階西端の新教室に移った。この校舎建設に際しては、年来補習科予算で蓄積されていた施設準備金が投入された。長い間の多くの先輩の意志が、新装なった補習科教室にこめられていることを銘記すべきである。
> （記念誌編集委員会編『創立八十周年記念　最近十年の歩み』（岡山県立岡山操山高等学校創立八十周年記念事業実行委員会,1979）,p.170）

1958（昭和33）年に設置された補習科であるが、独自校舎が作られるまでは14年を要したということである。しかも、その費用にはそれまでの補習科の予算から蓄積されたものが使われたのだという。予算処理の権限は生徒たちにはないので、「長い間の多くの先輩の意志」が新教室にこめられているというのは必ずしも正確な記述ではない（もっと別のことに使ってほしかったという先輩がいてもよいので）。しかし、間借り状態であることを快く思わないことは、その前年までは本科の生徒として在籍していたことを考えれば、ごく

当然のことではある。

むしろここで興味深いのは、そのような先輩の意志という形で、補習科への一定の帰属心が語られているということである。補習科というものが受容されていることが示唆されるからである。

一期生の卒業に合わせて補習科が設置された岡山大安高等学校でも事情は大きく変わらない。沿革史では以下のように触れられている。

> 一九六六年度（昭和四十一年度）より本校の卒業生の希望者に対し、補習教育を行うことを目的として、第二棟三階のPTA会館（ホール）に「補習科」が設置され、約九十名の卒業生が学んだ。その後、創立二十周年記念として建設された校友会館に場所を移した後、中等教育学校開校を受けて二〇〇九年度（平成二十一年度）をもって廃止されるまで続いた。
> （『岡山県立岡山大安寺高等学校　創立五十周年記念誌』（岡山県立岡山大安寺高等学校,2012）,p.92）

PTAが設置した補習科なので、PTA会館で授業を行うことは必然ともいえるが、授業を行うことを前提として作られたものとは考えられず、校友会館の教室をもって独自教室の設置と考えるべきだろう。やはり10年以上の年月を要している。

さらに後発の岡山芳泉高等学校では、独自教室の設置までの時間は短い。沿革史では以下のように触れられている。

> 52年から2年間は、合併教室が補習科教室にあてられた。この教室は収容量が大きいことでは申しぶんないが、4階にあって不便なうえに、広い教室であるため11月ごろからは寒さが身

にしみ、応急の暖房設備を工面するなど、担当者は苦労が多かった。

昭和54年6月芳友会館が落成し、7月から補習科教室がその2階に移された。新校舎で設備もととのい、恵まれた環境で勉学に専念できることになった。

補習科は私大志望の生徒のための十分な講座を設けてやれない、また、補習科を頼りにするために3年生の受験に対する緊迫感が欠けるなどの問題をもっている。しかし、心身ともに不安定な浪人生活を、比較的安定した環境で送ることができる点で、ここで学んだ生徒たちには大きな寄与をしてきた。

（創立十年誌編集委員会編『創立十年誌』（岡山県立芳泉高等学校創立10周年行事委員会,1983）,p.96）

独自校舎の設置までは2年である。ただし、この短さが補習科というものの「市民権」によるものかは不明である。

この沿革史では、私立大学対策の不備についても語られている。補習科設置後ほどなくして共通一次試験が始まったことや、国公立大学を回避した結果としての私立大学入試の難化を考えれば、国公立大学と私立大学とでは受験対策に大きな隔たりが生じることになる。受験準備教育を専門とする機関において、私立大学対策の不備というのは、重大な問題になりうるのである。

では、補習科の教育課程はどのようなものだったのだろうか。次号ではこの点について検討する。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド(7)
―早稲田大学大学史資料センター「3号館旧蔵資料」―

田中(たなか)　智子(さとこ)(早稲田大学大学史資料センター)

前号より、個別の大学アーカイブズを1機関ずつ取り上げて、(1)基本情報、(2)資料紹介、(3)検索手段について紹介している。第2回目の今回は、筆者の現在の職場でもある早稲田大学大学史資料センターと、その所蔵資料の中で筆者がより多くの人に知ってほしいと考える「3号館旧蔵資料」群について紹介していく。

(1)基本情報

早稲田大学大学史資料センターは、『早稲田大学百年史』等を編纂していた大学史編纂所を改組するかたちで1998年に早稲田キャンパス2号館内に設置された。その後2回の移転を経て現在は西東京市にある東伏見キャンパス79号館(東伏見STEP22)5階にある。「早稲田大学大学史資料センター規程」(1998年5月21日制定)によると、その設置の目的は「本大学の歴史、創設者大隈重信および関係者の事績を明らかにし、これを将来に伝承するとともに、比較大学史研究を通じて、本大学の発展に資すること」(第2条)となっている。しかしこれは設立当初に制定されたもので、そこから約20年の月日が経過する中でセンターの事業内容も変化し、現在は大きく分けて①『早稲田大学百五十年史』編纂と②レファレンス(資料の受入、閲覧等)が主な事業となっている。

開室時間は基本的に平日(授業実施日であれば祝日も)の9時から17時まで(昼休み12:30～13:30を除く)であり、学外者でも利用可能である。ただし、資料の出納および個人情報等のチェックに時間を要するのと、閲覧スペースが限られているため、事前予約

制をとっている。また最近ではスタッフが会議等のため早稲田キャンパスに出向く機会も増え、レファレンスが休止となるケースも増えている。その場合は同センターホームページの「ニュース」欄（https://www.waseda.jp/culture/archives/news/）に情報が掲載されるので、そちらを適宜参照して閲覧予約をしていただきたい。

（2）資料紹介

同センターの数ある所蔵資料の中で、筆者が最も紹介したいのは「3号館旧蔵資料」群である。当該文書群は「西早稲田キャンパス3号館の屋根裏に保管されてあった多数の資料が、昭和60年（1985年）7月、大学史編集所に移された」ものであり、その後別種の資料が何点か追加され、資料総数3381点の比較的大きな資料群となっている[1]。

同資料群の特徴を一言でいうと、とにかく「雑多」である。「雑多」というのは、ある特定の時期や学校に限定されるのではなく、明治期から昭和期まで、大学のみならずその付属学校関係の資料までカバーしているということである。その種類の多さから、同センターホームページのWeb目録上でも、「A 東京専門学校」「B 旧制大学」「C 付属学校（旧制）」「D 新制大学」「E 付属機関・建物・施設・土地」「F 管理・運営」「G 事務部門」「H 教職員・学生」「I 功労者」「J 記念事業・校友」「K 刊行物」「L その他」「M 会計帳簿類」の13のカテゴリーに分類し、さらに各カテゴリーを細かく項目分けしたものを掲載している[2]。

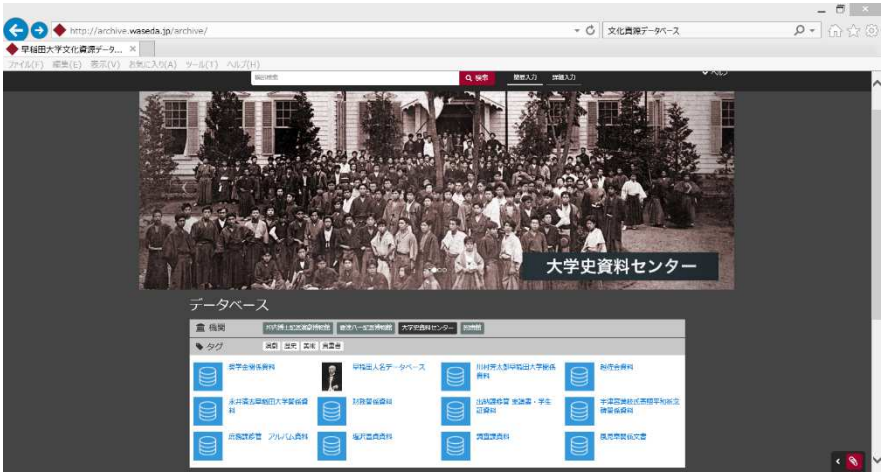
以上A～Mのカテゴリーのうち、注目すべきものとしては、「C 付属学校（旧制）」の中の「清国留学生部資料」および「寄宿舎資料」があげられる。清国留学生部とは。急増する清国からの留学生に対

応する特設機関として1905年に設置されたものであり[3]、「清国留学生部資料」には当時の留学生の名簿や成績簿、留学生寄宿舎関係など合わせて73点の資料がある。「寄宿舎資料」は、付属学校のカテゴリーに入ってはいるものの、大学の寄宿舎関係の資料である。1902年から1918年までの寮日誌や寮生名簿など111点の資料があり、期間は短いものの大学寄宿舎関係でここまでまとまって残っているのは珍しいのではないだろうか。

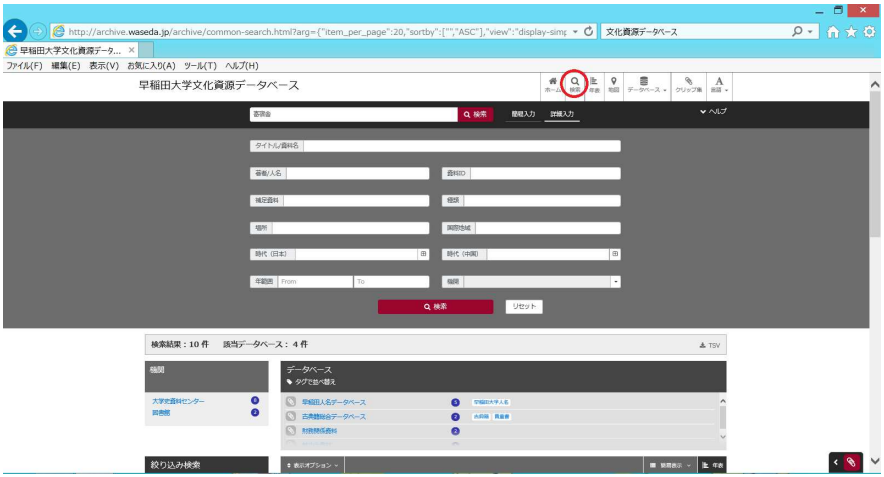
他にも紹介したいカテゴリー・項目は多々あるが、紙幅の都合上、以上の2点にとどめておく。前述の通り、「3号館旧蔵資料」は「雑多」ではあるが、それゆえ教育史関係の研究をしている者にとっては、興味・関心をひく資料の1点や2点は発見できるであろう資料群となっている。読者の方々もぜひ一度「3号館旧蔵資料」の目録を見ていただきたい。

（3）検索手段

「3号館旧蔵資料」およびその他の資料目録は、同センターホームページ内の「所蔵資料目録」（https://www.waseda.jp/culture/archives/holdings/list/）から参照することができる。しかし、同目録はPDFをWeb上にアップロードしただけのものであるので、横断検索等はできない。そこで紹介したいのが、本年6月公開された會津八一記念博物館・演劇博物館・大学史資料センター・図書館の学内4機関合同の横断検索システム「早稲田大学文化資源データベース」である（次頁写真）。



ここでは各機関が所蔵する資料の目録・画像等を閲覧することが出来るほか、キーワードによる横断検索も可能である。画面上部の検索ボタンから詳細検索画面に飛び、資料名・人名・年代などで絞り込み検索をすることも、特定のキーワードで簡易検索を行うこともできる。



検索結果は各機関・データベースごとに表示されるので、目当ての資料を発見したら、当該機関に電話・メール等で連絡し、閲覧予約をすればよい。

ただし、この文化資源データベースはまだ稼働したばかりであり、各機関ともに未だ一部のデータしか移行できていない。大学史資料センター所蔵資料についても、前掲の「3号館旧蔵資料」をはじめ、多くの資料目録はまだセンターホームページ上の「所蔵資料目録」でしか確認できない。しかし、今後数年内には多くの資料目録や『早稲田大学百五十年史』のWeb版資料集（早稲田人名データベース、戦争犠牲者データベース等）を順次文化資源データベース上に公開していく予定である。同データベースの今後の充実を期待していてほしい。

（つづく）

――――――――――――――――――――――――――――

1　早稲田大学大学史資料センター「3号館旧蔵資料」（https://www.waseda.jp/culture/archives/other/2015/04/10/717/）

2 注1に同じ

3 清国留学生部については『早稲田大学百年史』第二巻第四編第九章「一　清国留学生部の特設」を参照されたい。

教育における自治（6）　石田雄『自治』を読む(5)

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

前号と前々号において、明治憲法体制期に、自由民権運動期の自由＝自治とは異なるものとして、名望家層の役割を重視した国家を支える「地方自治」がモッセや井上毅などによって導入されたことを、石田雄『自治』を読みながら確認してきた。

本号では、明治20年代の明治憲法体制期にスタートした国家を支える「地方自治」が日露戦争後の明治末には動揺していた様子を、石田雄『自治』の「「地方改良」と「農村自治」明治末の変化」と題された章を読みながら検討していきたい。

石田は、「明治憲法体制の基盤として位置づけられた「地方自治」の制度は、しかしそのまま安定的に存続したわけではない[1]」と指摘し、産業の発展に由来する農村の変化によって「地方自治」が危機に陥っていたと指摘する。

産業の発展に伴う農村の変化とは、第1に「名望家であることを期待された地主の中に、その期待された役割を果たさないものがあるという点[2]」、すなわち、大地主が寄生地主化の傾向が強まり、「工業化への投資を始めることによって村落共同体の共通利益への関心を低下させた[3]」という点にあった。これは名望家層を中心的な担い手として想定された明治憲法体制下の「地方自治」にとっては大きな変化である。

さらに第2の変化として、農村内部の階層分化に伴う共同体的連帯感が弱体化し、「都会熱」や「個人主義」の影響が大きくなっていたという。

こうした農村の変化は、農村を基礎とする国家全体の危機的状況を示すものと為政者はとらえ、その対応の一つが内務省主導の「地方改良運動」として示されたという。

石田が重視するのは、この「地方改良運動」が内務省主導のもとで、「中央報徳会」や青年団などの民的要素を利用した運動であった点である。石

田は、「中央報徳会」も青年団も、国家からの指導を受ける面を強くもっていたが、ある程度の自主性の要素も含んでいた（とくに青年団）と捉え、内務省主導の「地方改良運動」が「中央報徳会」や青年団などを利用したことが、「社会の多元的集団化という新しい傾向に対応するものであった[4]」と指摘している。

名望家層を中心につくられていた農村の連帯が「地方自治」を支えていたが、日露戦争後は産業の発展などによって「地方自治」を支えていた条件が崩れ始め、農村内の連帯を復活させようとする官主導の運動においても、農村自体とは異なる「多元的集団」の力を利用する状況になってきたというわけである。ここまで石田『自治』を読んで、日露戦後における農村の「地方自治」動向は、もしかしたら第一高等学校の寄宿舎において日露戦争前後から、「個人主義」の影響による寄宿舎自治の停滞や危機が叫ばれるようになった状況と何かつながりがあるかもしれない、と感じ始めた。

「地方自治」の動向と旧制高校の生徒「自治」を比較しながら考察することで、何かが見えるのではないか。明治憲法体制期とちょうど同じぐらいの頃に始まった旧制高校の寄宿舎や校友会の生徒「自治」は、どのような特徴をもち、どのような集団や個人によって支えられていたのか、そうした様子は日露戦争前後の時期にはどのように変質していくのか、そしてそれは「地方自治」の動向と何らかの意味で連動しているのか、あるいは連動していないのか、今後改めて考察してみたい。

1　石田雄『自治』三省堂、1998年、29頁。

2　同前掲書、29頁。

3　同前掲書、30頁。

4　同前掲書、34頁。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

編集後記

このたび、タイの北部で新種のトリュフが発見されたという。驚。熱帯域で発見されたトリュフは初とのこと。美食家らによれば、本場@イタリア産の白トリュフに似ているが、香りはマイルドだと。発見されたタイ北部の山岳地帯は、トリュフ生育に適した気温が平地より低くて湿度の高い天候であるゆえではないだろうか。試食したいものだ。（谷本）

今回は現在の職場の資料紹介を試みましたが、どうしてもどこか宣伝調になってしまい、反省です。いつ何時でも、どこを対象としていても、中立公正な紹介文を心がけたいものです。（田中智子）

私事ながら、現在も大正期の宗教系私学に関する調査を行っております。その調査の過程で難しく感じるのは、宗教系私学の母体となる宗教団体の「宗派」という存在の複雑さです。「宗教」とは「仏教」「キリスト教」という大枠で捉えることはできますが、それらの枠の中には無数に宗派が存在していることが、調査を進めていく上で明らかになってきました。そして、自分が宗教系私学の研究を進めていく上では、この「宗派」の存在を避けては通れないのだと感じ、一度整理して理解すべきだなと強く感じております。（雨宮）

国会解散・衆議院選挙の関係で、全国の大学の教職課程再課程認定申請手続きの前提となる、教育職員免許法施行規則一部改正のスケジュールが遅れています。当初は8月中には出る筈でしたので、2カ月以上の遅れとなりそうです。再課程認定申請書類の提出期限は来年3月末のままですから、12月か1月ごろに各大学の担当者が文科省へ書類一式をもって事前相談に行くことを考えると、かなりタイトなスケジュールということになります。全国の大学の教職課程申請がよいかたちで進んでいくことを心から願っています。（冨岡）

爽やかな秋空のもと、神田古本まつり(2017年10月27日～11月5日)に行ってきました。あいかわらずの人の多さに驚きです…。最近は、ネットの注文に頼っていますが、やはり本は実際に目で見たほうがよいです。いろいろな出会いがあります。ふだん読めないような本を探そうと思うのですが、つい教育関連の本に目がいってしまいます。(山本剛)

本ニューズレターＰＤＦファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader　などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用して A4 サイズ両面刷りに設定すれば A5 サイズの小冊子にすることができます。